

『過程の演習 新国語問題集』補足・解説・解答

6 13 今昔物語集

〈神戸大〉

問1 次の作品群の中で、『今昔物語集』より古い時代に成立した説話集はどれか、一つ選べ。

説話集は、基本的に平安末期の『今昔』以後のジャンル。貴族中心の文化が衰え、民衆に意識が向いていったことを意味する。鎌倉時代に入ってから皆さんの説話集が成立した。ニ『発心集』、イ『宇治拾遺物語』、『十訓抄』、ロ『古今著聞集』、ハ『沙石集』が鎌倉時代。

ホ『日本霊異記』だけが例外。奈良時代の日本最古の仏教説話集。

問2 本文中に使われている尊敬語の本動詞を四つ、終止形で記せ。同一の本動詞は、一度挙げるのみでよい。

・本動詞↓それを外すと、意味が欠落。敬意のない動詞に置き換え可。

例 「仏おはす」↓「仏あり」

・補助動詞↓それを外しても意味はわかる。例「仏高くなり給ふ」↓「仏高くなる」

問3 傍線部①～④を、それぞれ現代語訳せよ。

■鍵単語チェック

①●さらに——（なし）

●ずちなし

②●むさぼる

③●おぼろけなり

●やは

④●用ゐる

問4 傍線部A「盗人高き物踏まへてまた及べども、いよいよ高くなりまさり給ふ」とあるが、どのようなことを述べているか、七〇字以内で説明せよ。

☆古典の「どのようなこと」↓主語、目的語等を補って訳すのが基本。とりあえず訳す↓補う。

（訳例）「盗人が高い物を踏み台にして、また、届いたが、ますます高くなりになる。（35字）」

ここに補う。傍線部を前に延長して、「仏の御頭の玉を取らむとするほどに、この仏、やうやく高くなり給ひて及び付かれず」の内容も盛り込むといい。

（解答例）盗人が、眉間の玉を取ろうとすると、仏の背丈が伸びて届かないので、踏み台に上って取ろうとするが、そうすると仏はますます高くなった、ということ。（70字）

問5 傍線部B「思ひ」とは、誰のどのような思いか、文脈に即して五〇字以内で説明せよ。

●思ひにたがふ「教へにたがふ・契りにたがふ」——にそむく・——とくいちがう

●すでに「多義語——落とし穴！」

（訳例）思いにすっかりそむいた・思いとすっかりくいちがった

「文脈に即して」とあるのはヒント。直前の文もちゃんと訳してみよう。「仏様は）どうしてこのように高くおなりになって頭の玉を惜しみなさるのか！」に続く「思ひ」。「どうして！」と、この盗人が嘆いているところだから、これは「盗人の思い」。「私の、仏に対する思いとすっかりくいちがった！」という嘆きだ。「私は、仏様はすべての人間を救うと思っていた。なのに仏様は、頭の玉を取らせまいと高くなっていく。それは、私の思い（期待）にそむくものだ！」という流れ。

求められているのは、「仏様はすべての人間を救うはずだという私の思い」の部分。☆要素をもなく入れるには、該当箇所をできるだけ正確に訳すこと。

〔参照箇所〕「仏の世に出でて菩薩の道を行じ給ひしことは、われら衆生を利益拔済し給はむがため（目的）なり。伝へ聞けば、人をすくひ給ふ道には身をもむさぼらず、

命をも捨て給ふ（方法）。（略）いかにいはんや、この玉を惜しみ給ふべからず（方法）。貧しきをすくひ下賤を助け給はむ（方法）、ただこれなり。」

- ・ 仏の目的⇨すべての人間を救う
- ・ 方法⇨自分の身を犠牲にする
- ・ 適用〔目的〕⇨貧しい私を救う
- ・ 適用〔方法〕⇨眉間の玉を与える

これらの要素を入れる。五十字というのは、少し窮屈。筆力が要るかも。

（解答例）仏は人間を救うために、自分を犠牲にするから、貧しい私のために、玉をくださるはずだという盗人の思い。（49字）

◎問6 傍線部C「盗人をばゆるしつ」とあるが、国王はなぜそのような処置をしたか、本文に即して八〇字以内で説明せよ。

▼なぜ、は、直前・直後。直前・直後を正確に訳してみる。

〔参照箇所〕「国王この由を聞き給ひて、悲しびの心をおこして盗人を召して、値を限らず玉を買ひ取りて、もとの寺の仏に返し奉り給ひて、盗人をばゆるしつ。

まことに心をいたして念ずる仏の慈悲は、盗人をもあはれび給ふなりけり。

☆国王の視点から整理する。この由⇨仏頭をうなだれて立ち給へること。この報告を受けて、

●①国王は、仏が盗人に玉を与えたということが本当だとわかった（認識）。

続いて王は、「悲しびの心をおこす」。二つ目の傍線部を訳して「まことに、心を尽くして祈念したときの仏の慈悲は、盗人をもあわれみなさるのだ！」。

●②仏はほんとうに慈悲の心をもっておられるのだ（感動）。これが二つ目の要素。

（解答例）国王は、仏が頭をうなだれていたという報告を受けて、仏が盗人に玉を与えたことが事実だと認識し、また、心を尽くして祈ると仏は盗人にも憐れみをかけてくださるのだと感動したから。

【冊子の解答例】

問1 ホ

問2 おはす・おぼしめす・まします・召す

問3 ①⇨まったくどうしようもない

②⇨自分の身に執着せず

③⇨並大抵のことで仏の眉間の玉を取り下ろすことができようか、いやできはしないだろう

④⇨国王は盗人の話すことを信用なさらないで

問4 盗人が仏の眉間の玉を取ろうとすると仏は頭を高くするので、盗人は台に上がつて取ろうとするが、仏は取れないようにさらに頭を高くしたということ。（69字）

問5 仏は人々を救うために命さえも捨てるのだから、貧しい自分が玉を取ることも許すはずだという盗人の思い。（49字）

問6 国王は、頭をうなだれた仏の様子を聞いて、盗人に玉を与えたのが本当だとわかり、真心を尽くして訴えたと仏は盗人にさえも憐れまれるのだと、仏の慈悲の心に感動したから。（80字）

〔13〕次の文章を読んで、問1～6に答えよ。〈神戸大〉

今は昔、天竺の僧迦羅国にひとつの小伽藍あり。その寺に等身の仏おはす。この寺は、この国の前天皇の御願なり。仏の御頭には、眉間には玉を入れたり。この玉、世にならびなき宝なり。値限りなし。その時に貧しき人ありて、「この仏の眉間の玉限りなき宝なり。もしわれこの玉を取りて、買はむ人に与へたらば、子孫七代まで家樂しく、身豊かにして、貧しき思ひなからむ」。しかるに、この寺に夜半に入らむに、東西を閉ぢて、門戸守る人たゆみなく、たまたまに出入する人をば姓名を問ひ、行き所を尋ねれば、①さらにずちなし。しかりといへども、あひかまへて門戸のもとをうがちこぼちてみそかに入りぬ。寄りて仏の御頭の玉を取らむとするほどに、この仏、やうやく高くなり給ひて及び付かれず。(ア) 盗人高き物踏まへてまた及べども、いよいよ高くなりまさり給ふ。

しかれば、盗人、「この仏はもとは等身なり。かく高くなりまさり給ふは玉を惜しみ給ふなめり」と思ひて退き、合掌頂礼して仏に申さく、「仏の世に出でて菩薩の道を行じ給ひしことは、われら衆生を利益拔済し給はむがためなり。伝へ聞けば、人をすくひ給ふ道には②身をもむさぼらず、命をも捨て給ふ。いはゆる一羽の鳩に身を捨て、七つの虎に命を亡ぼし、眼をくじりて婆羅門に施し、血を出だして婆羅門に飲ましめ、かくのごとくのありがたきことをそら施し給ふ。いかにいはんや、この玉を惜しみ給ふべからず。貧しきをすくひ下賤を助け給はむ、ただこれなり。③おぼろけにては仏の眉間の玉をば下ろすべしやは。なまじひに生きめぐりて、世間を思ひわびて限りなき罪障を造らむとす。いかでかく高くなり給ひて頭の玉を惜しみ給ふ。(B) 思ひにすでに違ひぬ」と哭く哭く申しければ、仏高くなり給ふ心地に頭をたれて盗人の及ぶばかりになり給ひぬ。しかれば、「仏、わが申すことによりて、玉を取れとおぼしめすなりけり」と思ひて、寄りて眉間の玉を取りて出でぬ。夜明けて、寺の内の比丘どもこれを見て、「仏の眉間の玉は、いかなればなきぞ。盗人の取りてけるなめり」と思ひて求め尋ねれども、誰人の盗めると知らず。

その後、この盗人、この玉をもつて市に出でて売るに、この玉を見知れる人ありて、「この玉は、その寺にまします仏の眉間の玉近ごろ失せたる、これなり」と云ひて、この玉売る者を捕へて、国王に奉りつ。召し問はるる時に、隠さずしてありのままに

- 5 -

申す。④国王このことを用ゐ給はずして、かの寺に使ひを遣はして見せしめ給ふ。使ひかの寺に行きて見るに、仏頭をうなだれて立ち給へり。使ひかへりてこの由を申す。国王この由を聞き給ひて、悲しびの心をおこして盗人を召して、値を限らず玉を買ひ取りて、もとの寺の仏に返し奉り給ひて、(C) 盗人をばゆるしつ。

まことに心をいたして念ずる仏の慈悲は、盗人をもあはれび給ふなりけり。その仏、今に至るまでうなだれて立ち給へりとなむ語り伝へたとや。 (『今昔物語集』より)

〔注〕 ○僧迦羅国——現在のスリランカ。

○伽藍——寺院。

○御願——国王・后・王子などの発願によつて建てられた寺。

○合掌頂礼——手を合わせ、頭を地につける最敬礼。

○菩薩の道——悟り(仏)の世界の一步手前にとどまつて、衆生救済に努めること。

○利益拔済——利益をほどこし、救済すること。

○一羽の鳩に身を捨て——鷲に襲われた鳩を助けるために、自分の肉を鷲に与えたという釈迦の前世の話。

○七つの虎に命を亡ぼし——飢えた母虎と七頭の子虎のために自分の身を与えたという釈迦の前世の話。

○眼をくじりて婆羅門に施し——盲目の婆羅門に自分の目を与えたという釈迦の前世の話。

○婆羅門——古代インドの身分制で最高位にある僧侶・祭司階級の人。

○血を出だして婆羅門に飲ましめ——飢えた婆羅門に自分の血を飲ませたという釈迦の前世の話。

○心地に——様子を見せながら。

○比丘——出家した男性。

国王この由を聞き給ひて、悲しびの心をおこして盗人を召して、値を限らず玉を買ひ

取りて、もとの寺の仏に返し奉り給ひて、盗人をばゆるしつ。

まことに心をいたして念ずる仏の慈悲は、盗人をもあはれび給ふなりけり。その仏、今に至るまでうなだれて立ち給へりとなむ語り伝へたるとや。 (『今昔物語集』より)

問1 次の作品群の中で、『今昔物語集』より古い時代に成立した説話集はどれか、一つ選べ。

イ 『宇治拾遺物語』 ロ 『古今著聞集』 ハ 『沙石集』

ニ 『発心集』 ホ 『日本霊異記』

「 」

問2 本文中に使われている尊敬語の本動詞を四つ、終止形で記せ。同一の本動詞は、一度挙げるのみでよい。

問3 傍線部①～④を、それぞれ現代語訳せよ。

① 「 」

② 「 」

③ 「 」

④ 「 」

問4 傍線部ア「盗人高き物踏まへてまた及べども、いよいよ高くなりまさり給ふ」とあるが、どのようなことを述べているか、七〇字以内で説明せよ。

問5 傍線部B「思ひ」とは、誰のどのような思いか、文脈に即して五〇字以内で説明せよ。

◎問6 傍線部C「盗人をばゆるしつ」とあるが、国王はなぜそのような処置をしたか、本文に即して八〇字以内で説明せよ。

【解答】

問1 ホ

問2 おはす・おぼしめす・まします・召す

問3 ① Ⅱ まったくどうしようもない

② Ⅱ 自分の身に執着せず

③ Ⅱ 並大抵のことで仏の眉間の玉を取り下ろすことができようか、いやできはしないだろう

④ Ⅱ 国王は盗人の話すことを信用なさらないで

問4 ア 盗人が仏の眉間の玉を取ろうとすると仏は頭を高くするので、盗人は台に上がつて取ろうとするが、仏は取れないようにさらに頭を高くしたということ。(69字)

問5 仏は人々を救うために命さえも捨てるのだから、貧しい自分が玉を取ることも許すはずだという盗人の思い。(66字)

問6 国王は、頭をうなだれた仏の様子を聞いて、盗人に玉を与えたのが本当だとわかり、真心を尽くして訴えると仏は盗人にさえも憐れまれるのだと、仏の慈悲の心に感動したから。(80字)